

## 山脇巖に関する研究

### － 一連の住宅作品からみるバウハウス思想とその受容 －

日大生産工（院） ○勝又 楨哉 日大生産工 藤谷 陽悦

#### 1. はじめに

山脇巖は美術学校バウハウスに留学した数少ない日本人建築家である。バウハウスは1919年、ヴァルター・グロピウスによって開校され、閉鎖になる1933年まで多くの建築家、デザイナーを輩出し、さらには訪問者を引きつけるなどして世界のデザイン分野において多大な影響を与えたことが知られている。

山脇は帰国後、建築家・教育者として日本の建築界に貢献し、その主導的な役割を果たしてきた。しかし、日本の美術学校の基礎を作りあげるなど、教育者としての貢献は十分に認識されてはいるものの、彼が建築家としてどのような思想を持ち、どのような活動を行ってきたのかについては十分に明らかになっていないと言いが難い。既往研究では、バウハウス留学者について論じた研究は少なく、山脇についても「日本戦後モダニズム住宅の様相：諸井邸における細部意匠と空間構成の関係についての考察」<sup>1)</sup>、「ニューヨーク万国博覧会における山脇巖の展示設計と写真壁画」<sup>2)</sup>、「1930年代の万博における写真壁画とフォトモンタージュ：原弘《観光日本》、山脇巖《観光日本》、亀倉雄策《楽しい日本》(デザイン史,「想像」する「創造」～人間とデザインの新しい関係～)<sup>3)</sup>など、一つの作品について取り上げた研究はあるが、その生涯活動を通じて全体の作品について論じた研究は少ないといえる。

また、バウハウスに正式に留学した日本人は山脇巖と道子夫人、水谷武彦のみであるが、その中でも建築家として活躍し、日本に実際に作品を残した建築家は山脇巖だけである。こうした山脇の実績とバウハウスの普及という日本に対する社会貢献度を踏まえると、山脇を通して日本のバウハウス受容のあり方について考察することは意義ある研究といえる。

#### 2. 研究方法

本研究は文献調査を基本とし、まず山脇の一連の作品について調査・分析・比較・考察を試み、それらの建築作品の特色と変遷過程について明らかにする。次にそれら作品とバウハウス建築のデザインについて比較検討し、日本のバウハウス思想の受容態度について考察する。資料は『新建築』<sup>4)</sup>・『国際建築』<sup>5)</sup>・『建築文化』<sup>6)</sup>・『近代建築』<sup>7)</sup>などの建築雑誌のほか、山脇が残した著作と投稿記事、その他バウハウスに関連する文献を使用する。

#### 3. 住宅作品変遷とその特色

山脇が残した作品について上記の建築雑誌から[表1]を作成した。以下ではこの[表1]を主として、そこに挙げた作品の変遷と特色について述べていく。

#### 3-1 構造と工法

山脇の住宅作品は晩年に設計された「N画伯のアトリエ」を除き、いずれもが木造で建てられている。暖房や配管設備などをおさめる場所のみ、鉄筋コンクリート造あるいは、基礎部のみ鉄骨を採用した事例も見られるが、ほかはいずれも経済面等を考慮して、日本で造り易い木造が採用されている。

主要構造の工法は晩年に設計した「S小住宅」と「N画伯のアトリエ」で乾式工法を採用しているが、それ以外の作品は漆喰・モルタルなどを使用した湿式工法である。また木材の加工を簡略化、そして構造的に強くする目的で挟み梁工法も採用された。

#### 3-2 屋根型

屋根型は寄棟・方形・切妻・片流れと多彩な形式を採用しているが、陸屋根の住宅作品はない。それは長方形の箱型でスケッチされた作品として知られる三岸好太郎のアトリエにおいても例外なく、片流れ屋根にパラペットを立ち上げて実施されている。

また山脇は水平ラインを強調する際に、特に方形、寄棟を使用していると考えられる。なぜなら、[図1]より、山脇は方形・寄棟の立面図において軒先と棟高の差はほとんどなく、陸屋根のように見える表現方法を採用しているからである。それに対して、切妻、片流れ屋根は軒先と棟高の差がはっきりとする、勾配のきつい表現がされている。実際に方形・寄棟屋根の住宅は地面からみた際は陸屋根のように見え、実際の見え方と立面の間に生じるギャップを埋めるために、視覚上において様々な工夫を凝らしていた様子が見える。



【図1】立面表現比較（『新建築』をもとに作成）

屋根の見え方は水平へのこだわりが存在していたと

## The Study of Iwao Yamawaki

### － BAUHAUS Thought and Receptiveness in A Series of Housing Works －

Shinya KATUMATA and Youetu FUJIYA

[表1] 山脇巖作品比較(『新建築』・『国際建築』・『近代建築』・『建築文化』をもとに作成)

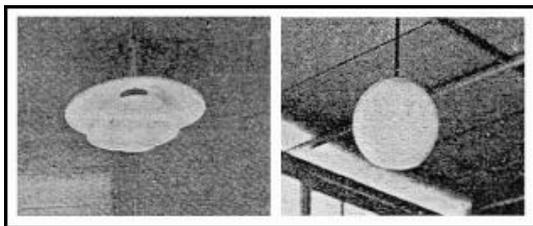
作品	掲載年	所在	構造	用途	設計者名義	外壁	窓	屋根型	和室	照明	家具	暖房器具・設備等	色彩	
大隈氏の住宅	1931年	東京市下谷	木造二階建	住宅	山脇巖	鉄網張り、淡灰色セメント珪砂レンガ	不明	不明	不明	不明	木製椅子	電気ストーブ、一部石炭ストーブ、暖炉、電気自動給排水設備	不明	
診療所と住宅	1934年	神奈川県鎌倉	木造二階建	診療所兼住宅	山脇巖	鉄網張り、淡灰色セメント珪砂レンガ	ステールサッシ、外壁木製格子漆喰色ペンキ仕上げ	銅板平葺、寄棟、勾配2/5分	一階：次の間、主人書房、二階：客室(水廻り付属)、客間	ペンダント(球) フラケット(長方形)	折敷みテーブル、網製鉄管カンテイルパー椅子、木製テーブル、網製鉄管組テーブル	木製椅子	茶、灰、青、朱、赤茶、黒、黄、木素地	
M氏アトリエ	1934年 1935年	東京豊/宮(現・中野)	木造二階建	アトリエ兼住宅	山脇巖	ラス張り、モルタル地、セイルクリート吹付、白色	木骨窓枠及びサッシ濃青色ペンキ	亜鉛引鉄板葺、片流れ、勾配比較的急	なし	ペンダント(ランプ)	網製鉄管カンテイルパー椅子、網製鉄管組テーブル、網製鉄管組ソファ	暖炉、暖炉表	白、青、朱、灰、黒、緑、白、茶、木素地	
週末の家—M博士(k博士の山荘)	1935年	神奈川県鎌倉	木造平屋建	住宅(別荘)	山脇巖	杉材、暖羽目相次張り、淡黄色	木部白又は防菌剤塗	亜鉛引鉄板平葺、丸天井、勾配4分	畳の間(7畳半)	ペンダント(球)	木製折敷み椅子	炉	朱、木素地	
住居と仕事場(山脇邸)	1935年	東京都目黒区駒場	木造二階建、ボイラー室鉄筋コンクリート造	アトリエ兼住宅	山脇巖	ラス張り、モルタル地、セイルクリート仕上げ、淡黄色、腰部分モルタル地	外回り窓・入口柱木部濃青色ペンキ塗り、一階一部ステールサッシ濃青色ペンキ塗り	淡野スレート葺、切妻、勾配2/5分、3分	一階：女中室、二階：予備室、主膳仕事室(二階)	ペンダント(球) ペンダント(コロン傘) シーリング(二段傘)	直線滑り出し式食卓、ミース式カンテイルパー椅子、木製折敷み椅子、木製テーブル、網製鉄管組テーブル	ボイラー室、ギルト放熱器(広間内)、電気蓄音機、ラジオ	黄、青、朱、銀、白、茶、藍、クリーム、黒、緑、茶、木素地	
選手に建つH氏別邸(湖南の別邸)	1936年 1937年	神奈川県鎌倉	木造二階建	住宅(別荘)	山脇巖	材料不明、淡黄色、腰部分茶色ペンキ仕上げ	ステールサッシ及びその他金属部分銀色	材料不明、寄棟、勾配不明	一階：居間、二階：客間、次の間、寢室	ペンダント(球) シーリング(二段傘)	網製鉄管カンテイルパー椅子、木製折敷み椅子、木製テーブル、網製鉄管組テーブル	ラジエーター	黄、灰、緑、茶、黒、サルモンピンク、藍、青、木素地	
M氏邸と附属歯科診療室(歯科診療室を特々住宅)	1936年	東京都府中	木造二階建、一部コンクリート造	歯科診療室兼住宅	山脇巖	モルタル塗りリシン仕上げ淡黄色、腰部分モルタル	窓枠木部暗紅色ペンキ仕上げ	亜鉛引鉄板平葺、アスファルト防水、防水モルタル、寄棟、勾配1/5分	一階：茶の間、女中室 二階：客間(8畳)	ペンダント(球) シーリング(二段傘)	網代青木製椅子、木製テーブル、木製折敷み椅子、木製テーブル、木製テーブル	ウォールラジエーター(浴室壁下窓下)、壁掛け電器設備(応接室)	黄、紅、白、青、茶、藍、木素地	
E氏の田園小住宅	1936年	東京都杉並区福寿町	木造平屋建	住宅	山脇巖	南京下見板張り、サルモンピンク色ペンキ仕上げ、腰部分モルタル地に引張り	建具：白ペンキ塗り	ルーフィング下地、銀灰色石綿液型スレート葺、片流れ、切妻、勾配急	和風客間、次の間	ペンダント(球) ペンダント(ランプ2)	木製椅子、木製テーブル、塗り付けソファ	ストープ	銀、灰、白、茶、赤茶、黒、木素地	
勝太郎の増築	1937年	東京都東谷	木造二階建	住宅	山脇巖	ルーフィング下地、杉板南京下見板張り、淡黄色	不明	不明	なし	ペンダント(球) 卓上スタンド(傘)	木製椅子、木製テーブル、塗り付けソファ	不明	黄、藍、白、銀、灰、木素地	
S氏住宅(S邸)	1937年	東京都渋谷	木造二階建、一部鉄筋コンクリート造	住宅	山脇巖	鉄網張り、モルタル地、リシン仕上げ、淡黄色、腰部分長手タイル張り	ステールサッシ淡青色ペンキ仕上げ	銅板平葺、寄棟、勾配2/5分	1階：仏間、客間 2階：予備室	ペンダント(球) ペンダント(コロン傘)	網製鉄管カンテイルパー椅子、木製脚がらす天板テーブル、木製折敷み布地ソファ	温水暖房ラジエーター	黄、茶、赤茶、金、黒茶、藍、青、黒、青、白、木素地	
O邸	1938年	東京都豊島	木造二階建地下部分コンクリート造	住宅	山脇巖	リシン仕上げ、淡クリーム、腰部分白色タイル張り	不明	富士リブスレート、方形、勾配3分	一階：女中室 二階：予備室	ペンダント(球) シーリング(三段傘) シーリング(三段傘) フラケット(球)	網製鉄管カンテイルパー椅子、木製脚がらす天板テーブル、木製折敷み布地ソファ、回転式	ラジエーター	クリーム、白、銀、灰、ブルー、紅、黄、黒、金、茶、木素地	
島田氏邸(S邸)	1937年 1938年	東京都中野	木造二階建、一部コンクリート造	住宅	山脇巖	リシン仕上げ、淡黄色	不明	リフスレート、方形、勾配不明	一階：女中室 二階：予備室	シーリング(円) シーリング(三段傘) シーリング(棒電球) フロアスタンド(半球)	網製鉄管カンテイルパー椅子、網製鉄管組テーブル、木製椅子、木製テーブル、木製テーブル	地下暖房室	黄、赤茶、灰、朱、藍、黒、木素地	
N邸	1938年	東京都中野	木造二階建、一部コンクリート造	住居	山脇巖	リシン仕上げ、淡黄色	不明	富士リブスレート、寄棟、勾配不明	一階：女中室、主膳室 二階：客間	ペンダント(球) シーリング(三段傘)	網製鉄管カンテイルパー椅子、網製鉄管組テーブル、木製椅子、木製テーブル、木製テーブル	金室床パネルヒーティング	青、緑、銀、黒、銀、紅、黄、金、茶、白、木素地	
●ニューヨーク万国博覧会パード・スペース日本館	1939年 1940年	ニューヨーク	不明	博覧会場	山脇巖	ラスモザイクタイル・緑・クリーム色	不明	不明	不明	ダウンライト(円)	網製鉄管カンテイルパー椅子、木製折敷み椅子、木製テーブル	不明	赤、白、黒、黄、青、クリーム	
H邸	1939年 1940年	東京都五反田	木造二階建	住宅	山脇巖	リシン仕上げ、淡黄色、腰部分色のラッチタイル張り	窓廻り木部：淡黄色、ペンキ塗り仕上げ	富士リブスレート、寄棟、勾配3分	一階：居間、次の間、女中室 二階：次の間、和風客間	ダウンライト(長方形1) ペンダント(球) フラケット(長方形体め込み)	木製折敷み椅子、木製テーブル	不明	黄、茶、赤茶、灰、藍、白、黒、柿	
K邸	1939年	東京都青山	木造二階建	住宅	山脇巖	リシン仕上げ、淡黄色、腰部分茶色タイル	不明	三州産瓦片面葺き、切妻、勾配2/5分	一階：赤の間、客室 二階：和風客間、次の間、納戸	ペンダント(球) フラケット(半円柱)	不明	不明	灰、木素地	
K邸	1939年	東京都三鷹	木造二階建	住宅	山脇巖	リシン仕上げ、淡黄色、腰部分茶色タイル	不明	富士リブスレート、寄棟、勾配不明	一階：女中室、倉庫 二階：和室	ペンダント(球) シーリング(三段傘) フロアスタンド(球)	カンテイルパー椅子、網製鉄管組テーブル、木製椅子、木製テーブル	ガスストーブ	緑、茶、白、灰、緑、赤茶、黄、藍、木素地	
岩瀬氏邸	1942年	東京都大森	木造平屋建	住宅	山脇巖	不明	不明	瓦葺、切妻、勾配不明	茶の間、居間兼客間、女中室	ペンダント(球) フラケット(長方形2) フラケット(半円柱)	木製カンテイルパー椅子	不明	不明	
●観光館	1949年	神奈川県横浜	木造平屋建	日本貿易博覧会場	山脇巖	南京下見、白ペンキ、さし竹、パナキ	濃黄色ペンキ	日本瓦、切妻、勾配不明	不明	不明	不明	不明	不明	白、黒、茶、材料素地
●銀座劇場	1954年	東京都銀座	鉄筋コンクリート造地上4階地下1階	劇場	山脇巖	鉄筋コンクリート造、モルタル吹付、一部漆喰張り	淡褐色	鉄網張り(一部アーチ)	不明	ダウンライト(円)	不明	不明	不明	赤、茶、白、材料素地
●観光展示Trade Fair 1956	1956年	ニューヨーク	鉄骨高層ビル	博覧会場	山脇巖	エスチライト板、三井ポード、白・黒・赤・黄・青	不明	不明	不明	ペンダント(円柱) ペンダント(球)	木製ベンチ	不明	不明	白、黒、黄、青、材料素地
T氏邸	1958年	東京都山手台	木造二階建(増改築)	住宅	山脇建築研究室(山脇巖・堀田美二・馬場信行)	ラワン堅目オイルステーン、腰部分アルミ板張り	ガラリ戸網戸付き	鉄板瓦葺葺き、オイルペン仕上げ、切妻、勾配4/5分	二階：和室	シーリング(長方形) スポットライト(傘)	竹製椅子、竹製折敷み椅子、木製テーブル、木製椅子、網製鉄管組椅子	不明	褐色、木素地	
S小住宅	1959年	東京都渋谷	木造平屋建基礎鉄骨	住宅	山脇建築研究室(山脇巖・馬場信行)	落とし込みフレキシブルシート敷地、シリコン吹付	不明	長尺鉄板瓦葺葺き、切妻、勾配不明	一階：仕事室	ダウンライト(長方形) スポットライト(傘2)	折敷み調理台、木製椅子	不明	木素地	
N氏邸	1960年	東京都自由ヶ丘	木造二階建	住宅	山脇建築研究室	羽目板、淡色オイルステーン	持張り：濃色オイルステーン仕上げ	長尺鉄板瓦葺葺き、切妻、勾配不明	一階：和室	シーリング(長方形変形) スポットライト(傘3) フロアスタンド(いちご)	木製椅子、木製テーブル、木製テーブル	不明	青、白、木素地	
N氏の別荘	1961年	東京都府中	木造平屋建一部鉄筋コンクリート造	住宅(別荘)	山脇建築研究室	茶褐色オイルステーン仕上げ	不明	長尺鉄板瓦葺葺き、切妻、勾配不明	一階：居間、寢室	シーリング(長方形3) スポットライト(傘4) シーリング(棒状蛍光灯)	木製脚ソファ、木製テーブル	不明	茶褐色、ライトグリーン、ブラックブルー、木素地	
●藤原町役場庁舎	1961年	神奈川県藤原町	鉄筋コンクリート造地上5階地下1階	町役場庁舎	山脇建築研究室(山脇巖・馬場信行・平塚誠一)	コンクリート打ち出し	不明	鉄網張り	不明	ペンダント(腰型) シーリング(棒状蛍光灯)	不明	風扇暖房設備	材料素地	
●桐朋学園大学校舎(第一期工事)	1961年	東京都国分寺	鉄筋コンクリート造地上3階地下1階	大学校舎	山脇建築研究室(山脇巖・坂本孝一・馬場信行)	不明	不明	鉄網張り	不明	シーリング(棒状蛍光灯) フラケット(連傘)	不明	冷暖房設備	材料素地	
M氏別荘	1964年	東京都	木造二階建	住宅(増築)	山脇建築研究室(山脇巖・大坪浩一・山行茂之)	不明	木戸組木、黒色ペンキ艶消し	記述なし	一階：木間、次の間	ダウンライト(長方形3)	木製椅子	不明	黒、緑色、木素地	
●桐朋学園大学校舎(第二期工事)	1964年	東京都国分寺	鉄筋コンクリート造地上4階地下1階	大学校舎	山脇建築研究室(山脇巖・大坪浩一・山行茂之・岡島真智)	モルタル刷毛引き、モルタル吹付及び刷毛仕上げ、一部プレキャストコンクリート打ち出し	不明	鉄網張り	不明	シーリング(長方形4) シーリング(棒状蛍光灯) シーリング(棒状蛍光灯) ダウンライト(円)	イームズ式折敷み椅子、網製鉄管組椅子、ソファ	不明	材料素地	
●日本大学芸術学部講堂	1966年	東京都葛西	鉄筋コンクリート造地上4階地下1階	大学校舎	山脇建築研究室(山脇巖・大坪浩一・山行茂之・岡島真智)	コンクリート打ち出し、縦型瓦葺コンクリート	不明	長尺重鉛鉄板瓦葺葺き、鉄網張り	不明	シーリング(棒状蛍光灯) ダウンライト(円)	ベンチ	不明	材料素地	
N南伯のアトリエ	1968年	神奈川県鎌倉	鉄骨、一部木造二階建	アトリエ兼住宅	山脇建築研究室	シボレックス漆と落とし込み、灰白色、付着窓外壁、ラワン線甲目塗装、ベッコウ色クマツカキ仕上げ	不明	石綿大波板、切妻、勾配不明	一階：控室	ペンダント(円柱) ペンダント(傘) フラケット(棒電球) ダウンライト(半球) フロアスタンド(傘)	木製椅子、木製テーブル、ヤコブセン式チェア	不明	コールマン・オイルブローンス、空冷ウインドー	
●日本大学芸術学部講堂増築	1971年	東京都葛西	鉄筋コンクリート造地上9階	大学校舎	山脇建築研究室(山脇巖・坂本孝一・石野行男・山脇茂之)	不明	不明	切妻	不明	シーリング(棒状蛍光灯) ダウンライト(円)	網製鉄管組テーブル、石製ベンチ	不明	材料素地	

考えられる一方、山荘建築については片流れ、数寄屋住宅については切妻が採用され、その建築の特色に合った屋根型を採用し、必ずしも陸屋根にこだわらない柔軟な姿勢を持ち合わせていた様子がうかがえる。また水平線を強調したフラット屋根においても雨漏りを防ぐため、単調な陸屋根にはしないという一本の軸に沿って住宅を考えていたと考えられる。

### 3-3インテリア家具

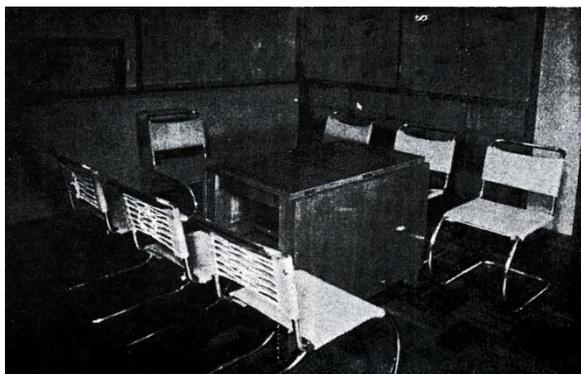
住宅では一連の作品で同じ型の照明が頻繁に使われている。1942年頃までは[写真1]のように球形のペンダントライト型・三段傘のシーリング型の使用頻度が特に高く、それ以降は長方体や棒状蛍光灯のシーリング型、スポットライトが多用されている。

これからわかるように、山脇は照明器具類の選択では市販品は気に入らず、自分でそれらをデザインして、同じデザインパターンの特注品として製作に当たらせていたことが考えられる。



【写真1】照明 左:三段傘シーリング 右:球形ペンダント  
（『新建築』をもとに作成）

家具類はミース式のカンティレバー椅子だけでなく、木製の椅子も配置され、その使用方法は実に多様であった。回転食卓・折りたたみテーブル・折りたたみ椅子など、室内を広く使うための工夫も考えていた。当時は洋風住宅において椅子式と座式の扱いが重要な課題であり、山脇は両者を融合させる工夫として二重床を採用し、そのうえ施主の希望を受け入れ際は、わざと両者を分離させることもあった。[写真2]は折畳み式テーブルの横にカンティレバー椅子が置かれており、それを示している。



【写真2】カンティレバー椅子と折り畳みテーブル（『新建築』より）

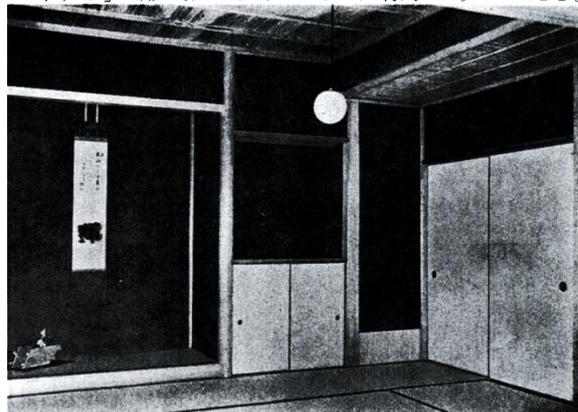
### 3-4設備と平面構成

日本には四季があり、夏冬の寒暖をどうやってしのぐかは今も昔も大きな課題であった。冷暖房設備が充実していない当時では、室内における適温の維持は現代よりさらに重要であり、山脇作品に設けられた設備機器類をみると、電気ストーブ・ガスストーブ・ラジエーター・パネルヒーティングなど的高级機材が揃えられていたことがわかる。住宅内であるにも関わらず、ラジエーターを使用して床暖房設備とすることもあった。また暖房設備を備えても、冷房設備がないため、東西に長く平面を配置にすることで通風換気を良くし、

室内においては二重床の床下、押入れなどに通風窓を設置して、冷暖の維持対策を練っていたことが考えられる。

### 3-5和室

[写真3]に示すように、和室は初期の作品から洋風住宅のなかに継続して採用されている。和室は現代住宅にありがちな大壁の室内空間ではなく、床柱・床框・落し掛け・地袋・飾棚・落ち天井・竿縁天井・雪見障子といった伝統的な和風意匠にこだわっており、それでいながら書院造りではなく数寄屋造りに傾倒していたことが考えられる。これは山脇が「数寄屋くずし」と表現している手法である。和洋を柔軟に取り込み、「くずし」の形式にこだわっていた様子がうかがえる。



【写真3】診療所と住宅・和室（『新建築』より）

### 3-6色彩と形態の変遷

山脇作品に見られる住宅デザインの変化は[表2]になる。

使用した色彩は赤・青・黄・白・茶・黒・灰・ピンク・赤紫・金・銀・材料素地となり、1939年頃までは赤・青・黄の原色が多用され、赤と青を対比させる傾向が強かった。逆に1939年以降は数寄屋を手掛けたことで、材料素地・灰・黒・白・銀などの落ち着いた色彩を使う例が多く見られた。

住宅の形態は、初期の1933年頃から1939年頃まではモダンな外観を心掛けている。1939年以降はしばらくの間数寄屋や伝統的な外観を手掛けているが、1950年頃に境に再びモダンな傾向に移っている。しかし、同じモダンでも前期と後期では形態が異なり、前期は垂れ壁・腰壁が多く、外観が一つの塊として扱われているが、それに対して後期では垂れ壁・腰壁が省かれるようになり、柱・梁・床・天井などの構成要素がはっきりと外観に表出して描き出される傾向が強まっている。

傾向が変わった要因として、考え出される一つの要因は「1939年ニューヨーク万国博覧会の展示設計」において「現代日本」をテーマにしたこと、もう一つは大規模建築を手掛けるようになったことと考えられる。その理由については、山脇が博覧会の設計主旨について「旧日本建築の要素を使用しつつも新興日本建築様式を基本に設計すること」<sup>4)</sup>と述べ、その直後に「二つの和風住宅」を発表していることと、設計者名義を山脇巖から山脇建築研究室に変えて発表していることが、それぞれ変化の時期と一致しているためである。

【表2】住宅デザインの変化とその要因

年代	1933 →	1939 →	→1968	
変化の要因	出来事	パウハウス帰国	紐育万国博覧会	定年
	名義	山脇巖		山脇建築研究室
住宅デザインの変化	型	モダン	数寄屋	モダン
	色彩	原色多様・材料素地	材料素地メイン	材料素地メイン

## 4. バウハウス建築との比較からみる思想

### 4-1 バウハウススタイルと山脇作品の比較

バウハウス建築の特色は一般的に鉄筋コンクリート・ガラス・鉄でできた箱型の建築として捉えられている。それらは乾式工法による工業化住宅として位置付けられ、家具では美術工業品を用いたことであった。これをバウハウススタイルと定義すれば、山脇の大規模建築はそれに分類され、住宅においては数寄屋、湿式工法、勾配屋根などの要素があるため単純にバウハウスの使用スタイルと言うことはできないが、家具ではたびたび工業製品の使用が見られるのでバウハウスに近い傾向であった。

山脇は晩年に発表した著書『樗・続』<sup>8)</sup>において、「自分はどこまでも国立バウハウスの最初の教科課程とその規約と思想を支持して行き度い。」<sup>8)</sup>と述べ、またローマクレメンスによる「バウハウスの精神と生活を示す」展覧会での言葉を引用して「バウハウスの本質はひとつの“様式”を作り出すところにあるのではなく、絶えず発展を続けていく過程にある。この本質は絶え間なく移り変わってゆく有機的な理念によるものであり時代と国との制約を受けない」<sup>8)</sup>と述べている。そのことから考えて、山脇はバウハウス様式にこだわっていた様子はなく、思想や理念に深く傾倒していたことが考えられる。

### 4-2 山脇の支持した思想

山脇の支持した思想とはどのような内容であったか、考察したい。バウハウスはヴァルター・グロピウス、ハンネス・マイヤー、ミース・ファン・デル・ローエというそれぞれ思想が違う校長によって経営維持され、その教員も個性的であるがゆえ多様な思想によって形成されていた。山脇が「最初の教科課程とその規約と思想・・・」<sup>8)</sup>と述べていること、更に1930年に当時のバウハウス校長であったハンネス・マイヤーではなく初代校長のグロピウスに手紙を送って入学許可を得ていたことから判るように、思想的に深く傾倒していたのはグロピウスであった。

グロピウスの思想は著作『デモクラシーのアポロン』<sup>9)</sup>にある次の言葉に集約される。「美をつくりだすことと美を愛することは、大きな幸福をもたらして人間を豊かにするばかりでなく、道徳的な力をももたらしてくれる、ということでもあります。」<sup>9)</sup>この言葉を実現するツールがバウハウスであり、そこでのシステムが、「才能のある若者が産業社会の順応主義に屈伏したり象牙の塔に引き込まれる以前に、かれらを芸術家として選抜してしまうこと・・・(中略)・・・かれらが秩序と美の感覚を、大量生産に、建築に、そしてコミュニティ・プランニングにもたらすことを望んだのであります。」<sup>9)</sup>という内容であった。つまり芸術家を選抜して生徒の美的感覚を鍛え、彼らが作り出す工業製品や建築に秩序と美の感覚を与えることであった。

### 4-3 山脇の活動の位置づけ

山脇はバウハウスでワシリー・カンディンスキー、ヨセフ・アルベルスの元で美的感覚を養い、優れた美的感覚を持つ作品を多くの雑誌に発表していた。しかし、山脇は建築の工業化について積極的に実践した形跡はない。その理由はグロピウスが唱えた日本建築に対する評価に見ることができる。「桂離宮がわれわれの感情に訴えてくるのは、ここでかつてデザインというものが、人間と、人間の生活様式と、そして人間の存在の現実と密接に結び付いていたからであります。」<sup>9)</sup>

グロピウスがバウハウスで求めた「秩序と美の感覚

を建築にもたらす行為」とは、日本の伝統建築に共通するものがあり、バウハウス工業化住宅とは乖離し、人間の生活様式と深く結びついた別のあり方として存在していた。

山脇は「日本とバウハウスで培った美的感覚」を用いて「風土に適した建築造り・座式と椅子式を含めた和と洋の融合」を実践している。つまりシステムの形式という工業化とは別のあり方としてデザイン活動を行っており、正にこれらの行為はグロピウスが評価した「デザインを人間の生活様式と人間の存在と現実と結びつける行為」に繋がる考え方であった。山脇は「スタイル」は違うが、根本はバウハウスと同じ思想にたち、とりわけグロピウスと同じ考えに立って日本版バウハウス建築を作っていたと考えられるのである。

## 5. おわりに

山脇の住宅作品のデザインは前期・中期・後期の3段階に分けられる。前期は形態がモダンで色彩が原色+材料素地、中期は形態が数寄屋で色彩は材料素地、後期は形態がモダンで色彩は材料素地といった傾向が顕著である。後期の作品において前期・中期の特色を受け継ぎながら簡素化し、禁欲性が全体特色とする傾向が強まっていくことから、この変遷過程は洋風と和風を融合し、それを新しい文化的創造に昇華させる行為であったといえる。山脇はそれを室内空間においては「数寄屋くずし」という手法で表現した。

建物の構造は大半が木造であり、モルタル・漆喰などの湿式工法が積極的に用いられ、平面は通風採光を得やすい東西に長い矩形を基本とした。屋根は見かけ上フラット屋根にすることが多いが、実際は片流れ・寄棟であり、雨漏りにはことさら留意していたと考えられる。

このように山脇は日本の風土・伝統を洋風と融合し日本の生活に結びつける活動をしてきたといえる。

これらの活動は一般的な「バウハウススタイル」という視点からみればバウハウスでないと見なされてしまう傾向が強いが、根本はバウハウスと同じ思想にたち、日本版バウハウス建築を作っていた。つまり山脇の作品はそれほど日本の建築文化に受容されていたといえる。

## 6. 参考文献

- 1) 伊藤亮、中川武、中沢信一郎、倉方俊輔、日本戦後モダニズム住宅の様相：諸井邸における細部意匠と空間構成の関係についての考察、日本建築学会関東支部研究報告集、2002、pp. 653-656、2) 山本佐恵、ニューヨーク万国博覧会における山脇巖の展示設計と写真壁画、デザイン学研究・研究発表大会梗概集、2007、pp454-45、3) 山本佐恵、1930年代の万博における写真壁画とフォトモンタージュ：原弘《観光日本》、山脇巖《観光日本》、亀倉雄策《楽しい日本》(デザイン史、「想像」する「創造」—人間とデザインの新しい関係—、デザイン学研究、研究発表大会概要集、2009、pp198-199、4) 山脇巖、新建築、新建築社、1933-1940・1942・1949・1954・1958・1960・1961・1968・1987、5) 山脇巖、国際建築、国際建築社、1930-1940・1954、6) 山脇巖、建築文化、彰国社、1957・1961・1966・1971、7) 山脇巖、近代建築、近代建築社、1958・1964、8) 山脇巖、樗・続、井上書院、1973、9) ワルター・グロピウス、訳：桐敷真次郎、デモクラシーのアポロン・建築家の文化的責任、彰国社、1972、10) 山脇巖、樗、アトリエ社、1942、11) セゾン美術館編、Bauhaus 1919-1933、セゾン美術館、1995、12) 藤森照信、藤森照信の原・現代住宅再見、TOTO出版、2002、13) エクスナレッジ編、バウハウス、エクスナレッジ株式会社、2004、14) グロピウス会編、グロピウスと日本文化、彰国社、1956、15) ヴァルター・グロピウス、デッサウのバウハウス建築、中央公論美術出版、1995、16) アドルフ・マイヤー、バウハウスの実験住宅、中央公論美術出版、1991